

## 連歌・俳諧 DB より抽出した連想語彙ネットワークの解析

岩井 茂樹 山田 奨治  
国際日本文化研究センター

本研究は、鎌倉以後興隆に向かい、中世の文芸、芸能に様々な影響を与えたとされる連歌・俳諧の連想語彙ネットワーク図を作成し、その概念構造を解析することを目的としたものである。方法としては、まず国際日本文化研究センターで公開している連歌・俳諧データベースを用い、連歌・俳諧における連想語彙の抽出を行った。その結果、抽出された語彙のほとんどが連歌からの用例であった。そこで、連歌の世界に限定し、連想語彙ネットワーク図を作成した。その概念空間は、春と秋の季節の軸、夜（日没後）と夕（日没前）を結ぶ時間軸で4分割された。さらに概念空間には時代的な変化も見られた。

An analysis of associated words networks extracted from *Renga* and *Haikai* databases

Shigeki IWAI and Shoji YAMADA  
International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken)

This research aims to illustrate and analyze the networks of associated words extracted from *Renga* and *Haikai* poems, which is said that it had influenced variously and considerably on the arts and literature of medieval Japan. At first, we extracted some associated words from *Renga* and *Haikai* databases provided by Nichibunken. We found that the most of extracted words are derived from *Renga*. Next, we made an associated words network diagram of *Renga*. The diagram is divided by two axes: the seasons (spring-autumn) and time (before and after sunset). In addition, we could observe that the diagram varies across the ages.

### 1. はじめに

連歌と、俳諧の連歌（以後単に俳諧とする）は、中世から近世にかけて盛んに行われた文芸である。両者は、文学の世界にとどまらず、絵画、芸能などにも大きな影響を与えていることが、先学の研究によって縷々指摘されてきた。例えば、小西甚一や島津忠夫は能楽との関係について、鶴崎裕雄や島津新は絵画との関わりを、熊倉功夫、伊地知鉄男は茶道との関係を指摘している。しかしながら、それらの研究は確かに多くの示唆を与えてはくれるものの、実際には必ずしも実証的とは言えないものもあり、同時代に興隆していた文芸、もしくはよく似た空間や様式で行われていた芸能といったことだけで関係づけられているような恣意的な論も少なくない。

とはいえ、連歌や俳諧には「式目」とよばれる複雑なルールがあり、その世界を理解することはそれほど容易ではない。したがって、ある特定のジャンルで連歌や俳諧の影響が指摘されたとしても、その連歌・俳諧の世界とはどんなものか、その全体像がはっきりしないまま論じられてきたというのが実状である。これが、従来の研究が恣意的であると見なされてもしかたのない決定的な要因であった。極言するなら、連歌はただ関連性のある語句が鎖のように連続していく文芸、といった理解だけで論じられてきたのである。

しかし、最もシンプルに考えれば、連歌や俳諧というのは、ある句（前句とする）に対し、次の句（付句とする）に前句にある単語や意味と関連する語彙を配して、発想を次々と展開してい

くゲームであるといえる。したがって、基本的に前句と付句の間には、必ず何らかの連想関係が成立していなければならない。この付け方を連歌では付合つけあひ（あるいは付様つけよう）という。

金子金治郎は、二条良基（1320～1388）の『僻連抄へきれんしょう』（1345 年成立）に挙げられている主要な付合の型を以下のようにまとめている。

平付ひらづけ：風景など、ありのままに並べて付ける。山に峰、浦に舟に付ける類である。

四手付よつて：前句中の複数の詞ことばを取り上げ、それぞれ縁語よりのあひ（寄合と呼ぶ）で付句を構成する。

景気付：前句のおもしろい風情、たとえば花に対し、これに応ずるおもしろい風情を付ける。

心付：詞のたよりもなく、寄合もなく、景気もなく、ただ心（意想）だけで付ける。

詞付：詞のたよりだけで、たとえば長いに縄、よるといふに糸を付けるをいう。

埋付うづみづけ：表面は付かないようにみえながら、底に深い心を含んで付いているをいう。

対揚たいよう：春に秋、朝に夕、山に野、昔に今など、対になることをあげて付けるをいう。<sup>2</sup>

当然のことながら、前句に全く影響されないで付けるということが、実際上不可能であることがわかるだろう。とすると、連歌・俳諧の付合を分析すれば、古来の日本語が織り成す連想関係がみえるはずである。

本論稿は、勢田勝郭かつひろが作成し、国際日本文化研究センター（日文研）が公開している連歌・俳諧データベース（連歌 197,228 件、俳諧 25,652 件、以後、連歌・俳諧 DB と略す）<sup>3</sup>の内、付句関係にあるデータ（つまり発句集などは除く）から連想語彙を抽出し、これまで必ずしも明瞭ではなかった連歌・俳諧の世界を、より明解に図示し、分析することを目的としたものである。

## 2. 連歌・俳諧 DB からの連想語彙抽出方法、およびネットワーク図について

連歌・俳諧 DB は、永禄以前（連歌師宗養が没した 1563 年まで）の現存する連歌作品のすべて、及び永禄以後 17 世紀末までの主要な連歌と、蕉門俳諧までの 17 世紀末までの主要な俳諧作品をデータベース化したものである。

連歌・俳諧 DB からの連想語彙の抽出手順はつぎのとおりである。まず、連歌・俳諧 DB から 5 文字・7 文字の句を取り出した。そこから、前句・付句を構成する 5 文字・7 文字のペアで、複数の用例があるものを Perl スクリプトにより自動抽出した。

その作業の結果、抽出されたものの一例を見ておこう。たとえば、『永禄年間百韻 28 巻』にある「さらたに一つきによなよな-あかしかた まくらにあきの-ちとりなくこゑ」と『天正年間百韻 57 巻』にある「わひつつも-うらなれけりな-あかしかた まくらにちかし-ちとりなくこゑ」とでは、前句の「あかしかた」（明石瀉）と付句の「ちとりなくこゑ」（千鳥鳴く声）が共通する。このように複数の用例があるものは、何らかの定型的な連想関係にある語彙を含む可能性が高いことは容易に推察できよう。

このようにして抽出されたすべての連想語彙候補について、連想関係の妥当性を目視によりチェックし、必要に応じて修正を加えた。前述の例では、「明石瀉」の連想語は「枕に千鳥鳴く声」となる。さらにこれらの連想語から名詞、動詞、形容詞、形容動詞を取り出し、連想語彙に分解した。例えば「枕に千鳥鳴く声」は、「まくら」「ちどり」「なく」「こえ」に分解される。

こうした抽出作業を行った結果、取り出された連想語のほとんどが連歌 DB からの連想関係であり、俳諧 DB からのものはわずかしかなかった。俳諧 DB からの抽出例があまりにも少ないた

め、俳諧の連想語彙ネットワーク図の作成は断念し、連歌 DB から抽出された連想語彙に限定して、連歌の連想語彙ネットワークだけを作成することにした。まず、抽出された 630 語の連想語彙の出現頻度を出し、頻度の降順に並べた。その結果の上位 50 語を示したものが、表 1 である。

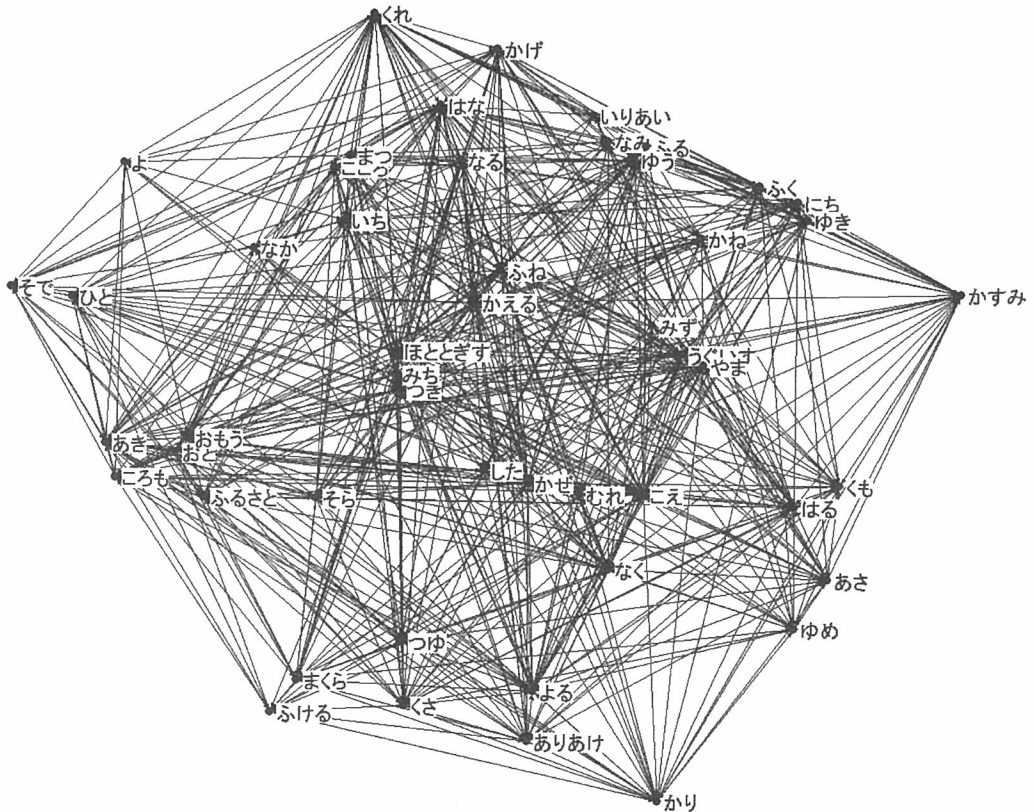
( ) 内には『古事類苑』<sup>4</sup>の索引に従い部類分けした結果を示した。例えば、(天) とあれば『古事類苑』の「天部」に記載があることを意味する。索引に項目がないものは (一) とした。

つき (天)、ほととぎす (動物)、あき (歳時)、やま (地)、こえ (天・人)、かぜ (天)、はな (植物)、はる (歳時)、うぐいす (動物)、なく (一)、よる (歳時)、ひと (人)、かすみ (天)、くれ (一)、かげ (一)、そら (天)、みち (地)、いち (一)、くさ (植物)、まくら (器用)、そで (服飾)、まつ (植物)、つゆ (天)、かえる (一)、ふね (器用)、かり (動物)、こころ (人)、ありあけ (歳時)、なみ (地)、あさ (歳時)、ゆう (歳時)、よ (一)、かね (宗教)、くも (天)、おと (一)、ゆめ (人)、ころも (服飾)、おもう (一)、みず (一、一)、なか (一、一)、ふるさと (一)、ゆき (天)、なる (一)、ふく (一)、にち (歳時)、ふける (一)、いりあい (歳時)、むれ (一)、ふる (一)、した (一)

表 1：頻度の高い連想語彙 (上位 50 語)<sup>5</sup>

次に、これらの 50 語について、Analytic Technologies 社の NetDraw2.18 を用いて連想語彙ネットワーク図を作成したのが図 1 である。図化には Gower Metric Scaling Layout を使用した。この手法は、結び付きの強いノードを近くに、弱いノードを遠くに配置するものである。

図 1：頻度上位 50 語の連想語彙ネットワーク図



### 3. 分析結果

#### 3.1 連想語彙の概念図

図1のネットワーク図に、表1で示した語彙のうち『古事類苑』で分類可能だったもののみを入れて再度図を作成し直してみよう(図2)。

図2：図1における連想語彙の位置(『古事類苑』で分類可能なもののみ)

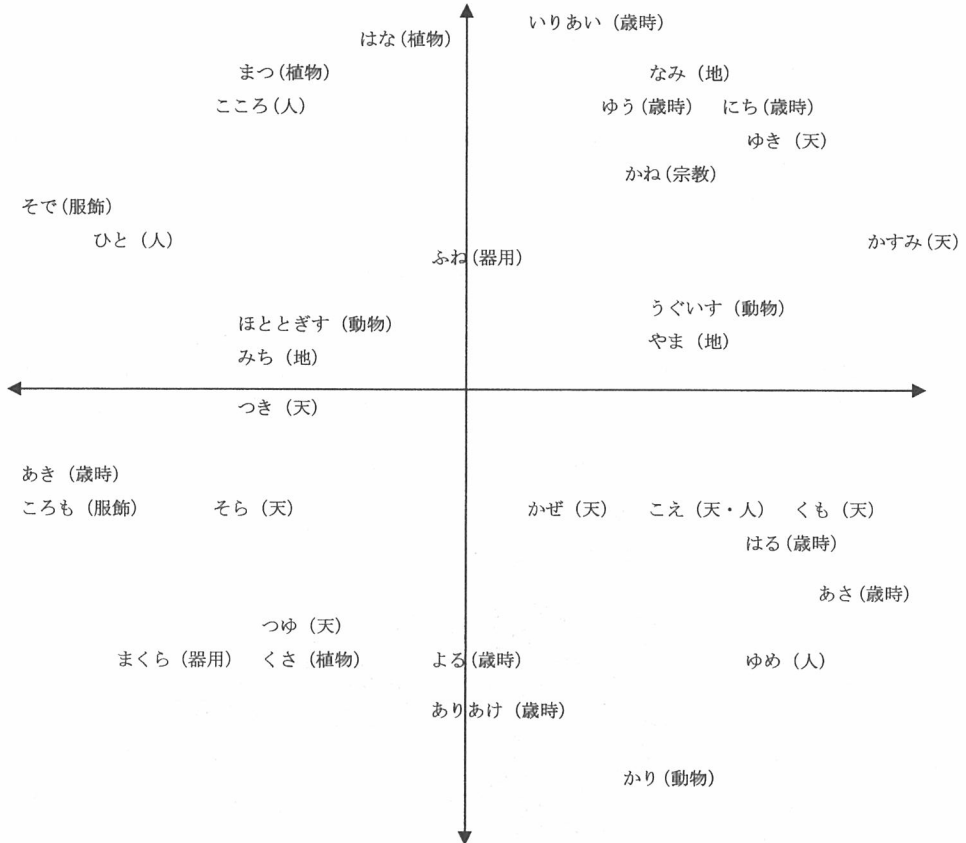
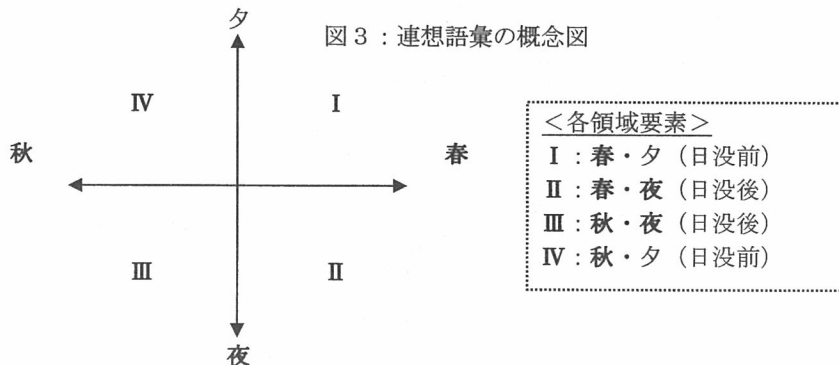


図1に見られる傾向を『古事類苑』の分類に従って図示したのが、図3の概念図である。



横軸は春と秋を結ぶ季節の軸、縦軸は夜(日没後)と夕(日没前)を結ぶ時間軸と解釈できる。

縦軸と横軸で区切られた各領域を図3のようにⅠ～Ⅳとすると、それぞれの領域は図3の〈各領域要素〉のようになる。領域ⅠとⅣには昼、とりわけ夕暮れ時に見られる景物、ⅡとⅢには夜、とりわけ早朝に見られる景物が配されている。また領域Ⅲには、人を思う恋の要素（「おもう」、「ころも」、「つゆ」、「まくら」など）が、領域Ⅳには世を厭う述懐の要素（「よ」、「なか」、「そで」など）が多く見られるように思われる。領域Ⅰ、Ⅱには特別な傾向は見いだせなかった。

ちなみに、「あき」と恋が近い関係にあるのは、「あき」が「飽き」に通じるからであり、「つゆ」が恋と深いのも「つゆ」を「なみだ」に喩えるという事が和歌の常套表現であったことと関係するものと思われる。

### 3.2 概念図の時代変化

次に、年代順にこの構図がどのように変化するかを調べることにした。まず、大まかではあるが、これまでの連歌史研究を参考に表2のような時代区分を行った。すなわち、宗祇以前（1450年以前）、宗祇の活躍期（1451～1502）、宗養の活躍期（1503～1563）、紹巴の活躍期（1564～1602）、紹巴以後（1603以後）という5期に分類した<sup>6</sup>。

表2で連歌・俳諧DBに収録されている句数に対する抽出句数の割合（抽出率）を見ると、とりわけ4と5の時期に特徴が見られる。4の時期は元のデータ数が少ないにもかかわらず、抽出率が高い（2.18%）。これは、紹巴の活躍期に、5・7単位の長い定型的な付句が多く作られたことを物語っている。反対に、5の時期では元の句数は4の時代よりも多いにもかかわらず、抽出率が極端に低くなっている（0.45%）。

この理由には、以下の3つの可能性が考えられる。第1は、付句の単位が5・7の単位よりも短い単位の連想語で付けられるようになったという可能性である。それは前代への反省と反動の現れであるのかもしれない。長く似たような語彙の付合が行われたことに対する反省と反動である。第2は、付け方が変化した可能性である。つまり、詞から意想中心へと付合の主流が変化したのかもしれないということである。単純に考えても、先にあげた金子によってまとめられた付け方で言えば、平付、四手付、詞付、対揚といった付合は詞の一致を生む可能性が高いが、景気付、心付、埋付が増えれば詞が一致する可能性はかなり低くなるのは当然であろう。紹巴没後に、このような変化が起こった可能性も簡単には捨てきれない。第3は、連歌の俳諧化である。この時期にはすでに俳諧の祖ともされる荒木田守武（1473～1549）はもちろんのこと貞門俳諧の祖、松永貞徳（1571～1653）が活躍しだす時期にあたり、そういった俳諧の影響を強く受けたという可能性も十分考えられる。実際、天正13年（1585）に紹巴が豊臣秀吉（1536?～1598）のために進献した『至寶抄』という書物には、「付合・寄合の事さして定る事有べからず候、古今の序にも人の心を種として萬の言の葉とぞなれりけると御入候、唯今も面白きと思召候事を仰出され候へば、をのづから古歌の心にも相叶候」、「古き連歌は只言葉の縁のみをとり付、心大形の句共も御入候つる、唯今は用付とて嫌申事多候」<sup>7</sup>などといった連歌の規則を緩和する、もしくは俳諧を志向する態度ともとれる言葉が見られるのも、また事実である。紹巴の没後、連歌界をまとめ上げるだけの力量をもった宗匠がでなかったことや、連歌があらゆる階級、地方にまで広まったという事実などが招いた結果かもしれない。

いずれが正しい理解なのかは俄には判断しかねるが、今後の解析を通して明らかにすべき重要な問題であると思われる。これらの判断材料としては、次のような言葉も参考になろう。それは「宗養死して、連歌ハ断絶也」<sup>8</sup>、あるいは紹巴が連歌の流布に努めたことを評して「我身の連歌をやすやすとして、更にふかき事を嫌ければ、いかなる童蒙も思ひつき道に入ることたやすかりき」<sup>9</sup>といった『歌道聞書』（1642年成立）の言葉である。宗養が没したことで、宗祇以来の連歌が廃れてしまったこと、紹巴が連歌を流布はしたが、それによってどんな童蒙（子供たち）もたやすく思いつくままに詠むようになったということもこれらの言葉から推察されるのである。このような状況が実際の連歌作品にも反映され、それが表2の結果となってあらわれているものと思われる。

【時代区分】		DBの句数(A)	抽出句数(B)	抽出率(%)
1	1450年以前:宗祇の活躍以前	17641	275	1.56
2	1451~1502年:宗祇の活躍から没まで	68048	764	1.12
3	1502~1563年:宗養の活躍から没まで	64437	869	1.35
4	1564~1602年:紹巴の活躍から没まで	19375	423	2.18
5	1602年以後:紹巴以後	25641	116	0.45
計		195142	2447	1.25
総句数(成立年が全くわからないものを含む)		200958		
【概念図作成のための時代区分】				
①	1+2:宗祇の没まで	85689	1039	1.21
②	1502~1563年:宗養の活躍から没まで	64437	869	1.35
③	4+5:紹巴の活躍以後	45016	539	1.20

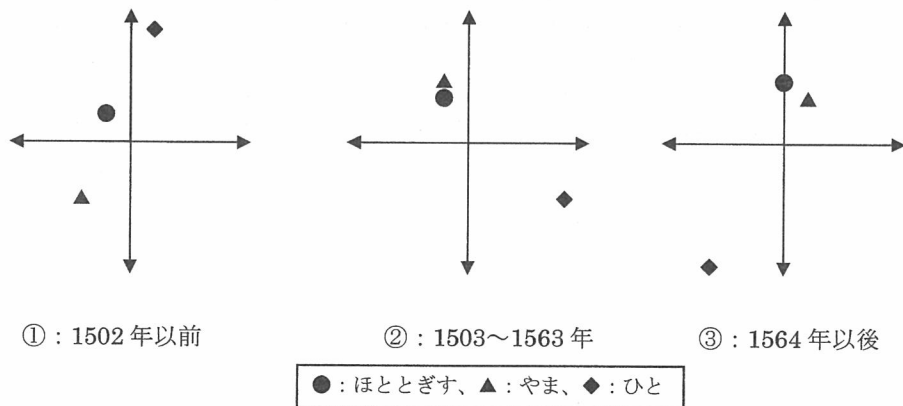
表2：連歌 DB の時代区分と連想語彙の割合

連想語彙ネットワーク図、および概念図を書くためには、ある程度抽出句数のばらつきを少なくし、かつある程度の量を確保しなければならない。そこで、「概念図作成のための時代区分」(表2)を設定し、この①～③期について概念図を作成し、その変化を探った。

その結果、いくつか個々の景物について変化が見られた。

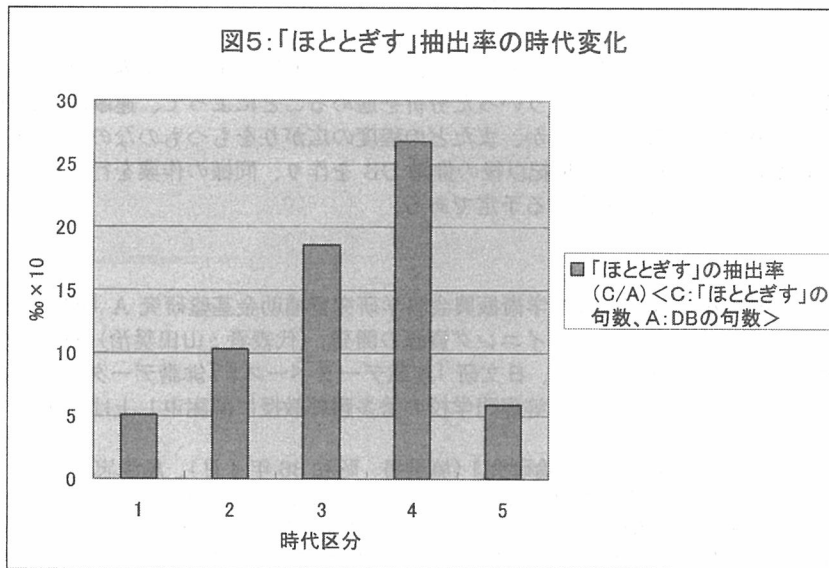
最も特徴的なものは、「ほととぎす」である。その変化は「やま」と「ひと」との関係性でみた方がわかりやすいと思われるので、それらの語の大まかな位置を図4に示した。図4からもわかるように、「ほととぎす」は②の時代以降「やま」との連想関係を強め、「ひと」から距離を取るようになる。「ほととぎす」は別名「死出しでの田長たながさ」とも呼ばれ、死出の山から来て鳴く鳥と見なされてきた。また「魂迎え鳥」とも言われ、この世からあの世へ魂を運ぶ鳥ともされてきた。その観念が次第に強まってパターン化していったものと思われる。16世紀以後の戦国武将などの辞世に縷々「ほととぎす」が詠み込まれていることとも関係があるだろう<sup>10</sup>。

図4：「ほととぎす」の位置変化



「ほととぎす」に関することをもう一点、付け加えるならば、抽出語彙に「ほととぎす」が頻出するのが、宗祇の登場以後であることも興味深い(宗祇の出生前<1421年以前>に限れば抽出例はわずかに4例しかない)。表3でわかるように、1と5の時代で抽出率が低い。5の時代については、全体の抽出率も極端に低下していたから、それと同様の理由で説明できると思われる。問題は1の時代であるが、この時代の抽出率が低い理由は、おそらく「ほととぎす」という語が少なくとも5・7の単位では、定型的な付合をほとんど持たなかったからであろう。この原因は

今のところ不明であり、今後の検討課題としておきたい。



### 3.3 連歌と俳諧の相違について

先に、連想語彙の抽出作業では、俳諧 DB からの抽出が非常に少なかったということを述べた。つまり、俳諧の語彙は 5 文字・7 文字の句単位で見た場合、連歌 DB、俳諧 DB の双方に連想関係がほとんど見られなかったのである。この結果から、本俳諧 DB に収録されている 17 世紀末までの俳諧には、5 文字・7 文字単位での語彙による連想関係はほとんどなかったと言えることができる。

これには、連歌と俳諧の相違、そして 17 世紀末までの俳諧中の相違の二つの原因が考えられる。連歌と俳諧については、俳諧が俗語を基本語彙としていること、滑稽味を志向する、など連歌との基本的な性質が全く違っていることから、連歌（同時代を含む）と一致する例がほとんど見られないことについては容易に納得できよう。しかしながら、俳諧内で抽出例が少ないという事実には、属目すべきであろう。17 世紀末まで、つまり松尾芭蕉（1644～1694）による蕉門俳諧が確立され、主流となるまでの俳諧は、勃興・模索期であり、かついろいろな流派が次々と興衰した「激動の時代」であって、その過程で発想、付合、詞などについて様々な新しい試みが繰り返されたことは想像するに難くない。だとすると、抽出例がほとんどなかったという結果は、むしろ当然のものであったのかもしれない。

## 4. まとめ

本研究では、連想語彙を抽出するという方法によって、連歌の世界の概念図を作成した。その結果、概念図は春と秋を両極におく季節の軸で二分され、夜（日没後）と夕（日没前）の時間軸によってさらに二分された。

連歌の時代区分を行い、各時代での連想語彙の抽出率を比較した結果、紹巴の時代と、その没後の時期に特徴が現れた。紹巴が活躍した時代の抽出率は非常に高いが、反対に紹巴没後の抽出率は極端に低かった。この背景には、付合の変化、あるいは連歌の俳諧化などの影響などが考えられる。

さらに概念図の時代変化を見た結果、「ほととぎす」、「やま」、「ひと」といった語彙に大きな変化が見られた。時代が下ると「ほととぎす」は「やま」との連想関係を深め、「ひと」から離れる傾向が観察できた。

今回の抽出作業では、俳諧 DB からの抽出例がほとんどなかった。これは、連歌との使用語彙、指向性の相違、それに俳諧がその勃興、模索期であったこと、などの要因が大きく影響したのではないだろうか。

本研究によって、これまで必ずしも明らかではなかった連歌・俳諧の世界、とりわけ連歌的世界のおおよその姿を図化できた。こういった分析を進めることによって、連歌的な連想世界が、日本文化にどの程度浸透しているのか、またどの程度の広がりをもつものなのか、などが明らかになる可能性がある。さらに 18 世紀以後の俳諧 DB を作り、同様の作業を行って、連歌と俳諧の世界の違いなどについても追求する予定である。

## 謝辞

この報告は平成 16～18 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 A「前近代日本の諸概念を対象にした知識発見のためのマイニング資源の開発」（代表者：山田奨治）の補助を受けて実施した研究成果の一部である。また、日文研「連歌データベース」「俳諧データベース」の基になるデータを作成された、奈良工業高等専門学校の前勝勝教授に感謝申し上げます。

<sup>1</sup> 能楽については、小西甚一『能楽論研究』（塙選書、昭和 36 年 4 月）、島津忠夫『能と連歌』（和泉書院、平成 2 年 3 月）などに指摘がある。絵画との関係については、鶴崎裕雄「連歌師の絵心―連歌と水墨山水画、特に瀟湘八景図について―」『芸能史研究』第 43 号（芸能史研究会、昭和 48 年 10 月）や島尾新「連歌的世界の図像学―室町時代の『尽し』風屏風を例に」（板倉聖哲編『講座日本美術史』第 2 巻、東京大学出版会、平成 17 年 5 月所収）などがある。また能や歌舞伎、茶道などとの関係については、「特集：連歌と能・狂言と―中近世の集团的演劇性」（『国文学 解釈と教材の研究』第 43 巻 14 号、学燈社、平成 10 年 12 月）所収の諸論稿があるが、この中に茶道との関係を論じた熊倉功夫「茶の湯の連歌的性格」がある。茶道との関係を述べたものには他に、伊地知鉄男「中世的芸能の性格―たとえば連歌と茶湯について」（『伊地知鉄男著作集』Ⅱ、汲古書院、平成 8 年 11 月所収）がある。

<sup>2</sup> 金子金治郎「解説」『連歌集 俳諧集』（『新編日本古典文学全集』61）、小学館、平成 13 年 7 月、p.283

<sup>3</sup> <http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/renga.html> および  
<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/haikai.html>

<sup>4</sup> 『古事類苑』は、明治 29 年から大正 3 年にかけて刊行された日本最大の百科史料事典である。歴代の制度、文物、社会百般の事項を天・歳時・地・神祇などの 30 部門に分類し、そこには慶応 3 年以前の基本的な文献から各項に関わる史料が採録されている。

<sup>5</sup> 「ゆう」は「夕べ」、「にち」は「日」（「火」と区別するため分類語彙として「にち」とした）のことであるから、それに従って分類した。

<sup>6</sup> 福井久蔵『連歌への道』（『福井久蔵著作選集』、国書刊行会、昭和 56 年 2 月）、木藤才蔵「連歌Ⅱ」（和歌文学会編『和歌文学講座』第 3 巻〈歌壇・歌合・連歌〉、桜楓社、昭和 47 年 7 月）などを参考にした。ただし、ここでは元データ数を鑑みて連歌全体の時代区分ではなく、連歌の隆盛期から衰退期、もしくは室町期の時代を新たに区分しなおした形となった。ちなみに、ここで設定した時代区分をまたぐ可能性がある句をもつ付句集（たとえば『新撰菟玖波集』など）は除外し、データの処理を行った。

<sup>7</sup> 伊地知鉄男編『連歌論集』下、岩波文庫、昭和 60 年 11 月第 2 版、pp.232～233。ルビは適宜省略した。

<sup>8</sup> 伊地知鉄男解題『梵燈庵主返答書・百韻連歌集・歌道聞書』（古典研究会叢書 別刊第 4）、汲古書院、昭和 50 年 8 月、p.335。適宜、読点を補った。

<sup>9</sup> 前掲『梵燈庵主返答書・百韻連歌集・歌道聞書』、pp.357～358。適宜、読点を補った。

<sup>10</sup> 有名なものを挙げておくと、柴田勝家（1522～1583）の辞世は「夏の夜の夢路はかなき跡の名を雲居にあげよ山ほととぎす」であり、室町幕府 13 代将軍、足利義輝（1536～1565）の辞世は「さみだれは露か涙かほととぎす吾が名をあげよ雲の上まで」であった。